

文化

無目的な空間を取り戻す



秋田駅西口に完成した芝生広場の夜(左)と昼(右)の様子

2019年から改修工事に着手していたJR秋田駅西口駅前広場南側の車寄せと芝生の広場が竣工し、1日から供用を開始した。改修に至る理由としては、回転半径の小さいロータリーを原因とした事故が頻発していたことや、歩道の融雪施設の老朽化などさまざまあるが、もともと大きなトピックは、平面駐車場という機能を取りやめて、それを市民の誰もが利用できる多生の広場へと改修したことであろう。

秋田駅西口 芝生の広場に寄せて

小杉 栄次郎



この地に鉄道駅が整備されて以来ずっと、駅前交通広場という「都市施設」として機能し、一部を平面駐車場として利用してきたが、17年に完成した駅直結の5階建て立体駐車場へ、その役割をハトントタッチすることになった。

【すぎ・えいじろう】1968年東京都生まれ。建築家、秋田公立美術大学教授。東大工学部卒業後、磯崎新アトリエ勤務などを経て、13年4月秋田美大准教授、18年4月から同大教授。県産木材を使ったJR秋田駅のリニューアル事業「ノーサンズ・プロジェクト」秋田プロジェクト「ウッドデザイン賞2017最優秀賞」で全体デザイン監修を務めた。

今まで平面駐車場を利用してきた市民からは反対意見もあつたと聞け、駅前の広いスペースが駐車場という単一機能の「施設」から、人(歩行者)が憩い過ぎずための、いわば目的や機能を持たないオープンスペースへと転換されたことは、土地所有者であるJRと秋田市の英断である

芝生を区切る舗装グリッドを目安にソーシャルディスタンスを取って、屋外のリビングのように日常の時間を過ごすのも良いだろう。保存されたケヤキ並木が木陰をつくる広場西側には、さまざまな高さで配置された家具が配置され、待ち合わせや休憩はもちろん、ランチを食べたり、仲間と語らったり、多様なアクティビティへと誘う空間も用意されている。

秋田に着任した7年前に駅前広場を見た時から、この広場が人のための場所が変わった素敵だろうという想いで、秋田駅西口駅前広場再開発計画モデル「ブルーラルシティー秋田プロジェクト」などの都市構想案を描き提案してきた。

今回の駅前広場整備で最も重要なポイントは、見た目のキレイさとか、イベント対応よりも、特定の目的を持たない市民が居心地よく過ごせるオープンスペースを駅前という街の中心に整備したことにある。

近代的思想から続く20世紀までの都市計画や街づくりは、場所を目的化することでその機能性を高めてきたが、徐々に場所(空間)とその目的(そこで行われるサービ)スが標準化され、その弊害として、その都市、その街らしさといったものはほとんど影を潜めていくことになった。

これをどう使うかは市民に委ねられているが、使い方の上手、下手は関係ない。それぞれのやり方で、日常の中の少しの時間をここで過ごす、ということから十分だと思ふ。小さな活動の集積が未来の街の姿へと繋がり、その風景の重なりが、その都市らしい景観となるだろう。

例えば芝の選定では、和芝ではなく洋芝が採用された。メンテナンスがしやすい和芝の品種は、見た目は良いが硬くてさらさらしているので、ゴロンと寝転がっても肌触りのよいフカフカの洋芝が張られている。管理に手間が多少かかっても、人の居心地を優先した結果である。

また、街が目的化された既知な空間で埋めつくされるに知って、何とも言えない窮屈

さど閉塞感が漂う、退屈つまらないものとなつてしまつたように思ふのだ。おそろく昔は「することが無いから行く」のが街であつたはずなのに、もはや目的の無い人は街に行かないし、そういう人を街も受け入れることができなくなりつつあるのが現状である。そうした状況を変えていくための再スタート地点として、特定の機能を持たないこのオープンスペースを捉えることができると思ふ。

先ずは都市の真ん中で、芝生の広場に寝転がり青空を見上げるところから始めてみようと思ふ。

また、街が目的化された既知な空間で埋めつくされるに知って、何とも言えない窮屈

先ずは都市の真ん中で、芝生の広場に寝転がり青空を見上げるところから始めてみようと思ふ。